

聴覚障害者が社会で働くという事



遠藤 貴志

卒業生に学ぶという事で、私の経験をお話させていただきますが、私の話が皆様のこれからの経験に何かお役に立てればと思います。

私は今、神奈川県職員として入庁し、現在は農業大学校の事務職員として働いています。

今の職に就く前は、埼玉県のとある企業でシステムエンジニアとして勤務していました。

聴力の程度は聴覚障害4級で、日常生活において手話は使わず、全て口話でコミュニケーションをとっています。

学校について、小中高大ともすべて健聴の学校に通っていました。

障害がわかり、補聴器を付け始めたのは小学校からで、通っていた小学校とは別に、東京都江東区の南陽小学校にありました聞こえと言葉の教室に通い、中学は難聴学級のある中学へ通っていました。

小学校の時は、補聴器をつけている事で、同級生から奇異な目で見られる事はありませんでしたが、特に大きな問題はありませんでした。自分のレベルの聴覚障害だと、確かに健聴者に比べ聞こえづらいところはありますが、普通学級に入っているにもかかわらずあまり変わりがなかった事から、同級生たちもそこまで気にならなかったのではと感じています。

もちろん、すべてが聞こえるわけで

はないので、言った言っていないの問題でケンカした事もありますし、いじめられた事もあります。

中学校では、特定の科目だけ難聴学級の教室で勉強し、それ以外の授業は同級生と同じ教室で受けていました。授業が聞こえにくかった事もありましたが、同級生がノートを見せてくれたり、わからなかったところを教えてくれたりと、助けてくれる部分が多く、周りに助けられていました。

高校からは、聴覚障害を持っているから他の人とは違うという扱いをされたくなかった事や、耳が聞こえないという事を、自分自身で頑張っ乗り越えるべきだと考え、高校は普通の学校に入りました。

また、環境も変わった事だから、自分が出来る範囲の限界について、どこまで出来るかを知ろうと、元々好きだった音楽に関して挑戦し、部活で吹奏楽をやってみたり、友達とバンドを組んでみたりと、今までしてこなかった事に挑戦しました。

学業以外の事に没頭していたおかげで、成績はあまり良いとは言えませんでしたけれども、自分が目標に対して何事も一生懸命やるという意識がはっきりしていれば、「障害なんて関係ない」って思えるような高校生活でした。

大学も普通の大学に入り、高校時代

以上に自分の出来る範囲の限界にいろいろ挑戦してみました。

例えば、軽音楽サークルに入ってドラムを担当し、4年間活動しながら、兼部していたオーケストラ部で大人数の前で演奏したりもしました。アルバイトもあえて接客業を中心にして、卒業まで勤め上げました。

大学卒業後は、システムエンジニアとして勤務していましたが、ここでの生活は、今まで生きてきた中で、聴覚障害である事のハンディキャップを非常に感じたときであり、同時に聴覚障害者が社会に出て働くという事どれほど大変かという事を学んだ時期でした。

聴覚障害を持っている事で、任される仕事を限定されてしまう事や、会議等の多くの人に関わる場では、聞こえづらい事から参加しにくいなど、「普通と違う」ことを感じる事が多々ありました。

私の場合は、幸い良い上司と先輩に恵まれたため、聴覚障害である事を理解していただきましたが、社会で聴覚障害を持って仕事するという事は、目に見える以上に多くの苦労がある事を痛感しました。

しかし、今までいろいろなことを経験して、今振り返ってみて気が付いた事は、「障害を持っている事を理由にしてはいけない」という事です。

この事は、何をするにも耳が聞こえないからこれが出来ない、あれが出来ないと限定するのではなく、これは出来ないが出来ないなりにハンディを乗り越える工夫を、最大限考えなければならぬという事です。

小学生から大学生まで、「学生だから」という目で見てもらえる事から、そこまで意識していなかった事も、いざ社会に出るとガラッと変わってしまいます。

そういった時に、凹まずに前向きに

やっていけるように、小さい時からそういった意識を植え付けることや、持ち続ける事が重要であると感じています。

私の場合は、聴覚障害の程度が軽い事もありますが、子供の時から母から口話について厳しく教育された事や、聞こえと言葉の教室や、難聴教室で多くの指導を受けた事で、相手の話を聞くために残っている聴力で相手の話を聞けるようになった事、ある程度相手の唇を読むようになった事で、今でも健常者とある程度のコミュニケーションが取れるようになりました。

幼い頃にこういった指導や教育を受けた事が、大人になって振り返ってみると必要であったと感じることが非常に多くあります。

また、こういったことが土台となるからこそ、社会に出たときになんとかやっていける部分もあります。

最後になりますが、指導してくれた大人達、支えとなってくれた先生方がいる事で子供は前向きになることができます。障害がある子供にとっても、幼いころに受けた刺激や記憶はずっと残り続けますので、ぜひ子供達の将来が明るくなるように、先生方、保護者の方に頑張っていたいただきたいと思います。

